

幼児の言葉の習得と教育方法

—幼稚園4歳児クラス、S児の言葉記録から—

栗原 昭徳

Language Acquisition in Early Childhood and Teaching Methods
A Case Study Based on the Recording of the Words of a Four-year-old Child "S"

KUWAHARA Akinori
(Received January 15, 2008)

キーワード：しりとり、図鑑、トランプ、言葉習得

はじめに

S児は、筆者の孫である。2008年1月現在、幼稚園の年中クラスに在籍する5歳3ヶ月の男児である。年少クラスに1年間通園したあと、ひきつづいて同じ幼稚園の年中クラスに所属している。このS児は、ちょうど2年前の満3歳の検診のおりに、言葉の遅れを指摘された。

それを契機に、筆者夫婦と同じ屋根の下で、ともに生活することになった。日常生活は、S児本人を中心に、S児の母親と筆者夫婦の4人が暮らす。ときに父親が、休みを利用してやってくる。S児は、この父親と共にいることが、とても好きである。

S児には、たしかに言葉の遅れの事実はあるのだが、ともに生活をする中で、たくさんの言葉を習得することになった。とりわけ、2007年12月中旬に行なわれた幼稚園行事の「生活発表会」をきっかけとして、生活の中の言葉が急激に増加していった。この事実は、幼児の教育方法について、たくさんをこのS児から学ぶことにもなった。S児の言葉の習得の過程を身近に見ていて、じつは、これまでの筆者の教育方法観(感)を変えるほどの、S児にとっては豊かな「言葉の獲得」なのであった。

身近な子どもの言葉の変化は、その事実を捉えることがなかなか難しい。とりわけ、毎日同じように繰り返かえて使われている生活の言葉は、変化を把握することが難しい。しかしながら、季節や行事の言葉、特別な遊びや遊具の言葉、限定された場面で使用される言葉となると、その獲得の過程や変化の様子は比較的容易に把握することができる。

本論では、S児の生活の中で用いられてきた数多くの言葉の中でも、限定された場面での特殊な遊びや物などに関する言葉に着目して、その変化の様子をとらえて、幼児の言葉の発達をうながす教育方法のいくつかを明らかにしてみたいと思う。

以下には、S児との生活の中で記録したたくさんの言葉を事例にして、教育方法の考察を進めるが、筆者の考察や意見などは、文中に「*」の印を付けて、該当する記録のすぐ

下で述べることにした。

1. 「しりとり」の言葉

2007年11月上旬、幼稚園では「しりとり」遊びが行われていたが、S児にとっては、「しりとり」の意味が理解されていないので、その遊びに参加することはできない。そのこともあって、祖母は意図的に「しりとり」に関する絵本を借りてきた。

2007年11月5日、17時40分、祖母が借りてきた『風の子しりとり』の絵本を読んだあと、S児・母親・祖母の3人で「しりとり」をすることになった。

最初に母親がS児に対して「とけい」と言ったあと、つづけて「い、い」と、「い」のつく言葉を考えて言うように、S児にうながした。

S児が「いのしし」という。

つづけて、母親が「し、し」と、「し」のつく言葉をうながす。

S児「しんかんせん」、母親「『ん』がつくから、おわり」。

*祖母による『しりとり絵本』の読み聞かせのあと、母親は「しり」につく音（おん）を何度も繰り返して言うように努めた。幼稚園での「しりとり」体験と並行しながら、家庭でも子どもの周囲にいて「しりとり」遊びの相手をする大人が何度か手本を繰り返すことで、S児はしりとり遊びが理解できたようだ。

次の問題。

祖母「めだまやき。き、き」、母親「きんぎょ、よ、よ」、

S児「ようふく」、母親「く、く」、

S児「くじら」、母親「ら、ら」、

S児「らくだ」、母親「だ、だ」、

S児「だいこん」、

母親「『ん』がつくから、おわり」

*祖母の問題の「めだまやき」の「き」に対して、母親が「きんぎょ」と答えた。これが手本となって、そのごのS児の「しりとり」言葉がつづいた。

しばらくして、S児が「まきろん」という。生活の中の言葉である。この言葉の最初の「ま」をつかって、しりとり遊びがはじまる。

母親「まんじゅう、う、う」、

S児「うし」、母親「うし？ し、し」、

S児「しか」、母親「か、か」、

S児「かめら」、母親「らっこ」、

S児「こあら」。

*この時点で、S児は、どうやら「しりとり」という言葉遊びのルールと意味が理解できたようである。S児は、「行ってきます」という言葉を聞くと、そのまま「オウム返し」に「行ってきます」ということが多かった。この「しりとり」遊びを通じて、「かめら」

「らっこ」「こあら」のように、意味的にはまったく関連のない言葉の中の、たった一つの「音」に着目して、記憶の中の一つの言葉を選び出すという知的活動が出来はじめたのである。この場面では、S児の繰り出す言葉を、母親が繰りかえすことにより、実質的にはS児一人の「しりとり」が展開されている。

「しりとり」遊びの場面での母親や祖母の働きかけの良さもあるが、それまでの動物園や水族館を見物しての言葉、幼稚園での子ども同士や先生方との言葉コミュニケーション、祖母による絵本の読み聞かせや、風呂場での50音表を用いた言葉の練習などが、功を奏してきたものと思われる。

「しりとり」は、伝統的な幼児の「言葉遊び」である。この「しりとり」は、かならず生身の人間を相手にした、生の言葉の「やりとり」で成り立つ。その意味で、人間同士が向き合い、ルールにのっとって行なう知的なコミュニケーション遊びであり、文化的な活動とも言える。S児にとって、しりとり遊びが出来はじめたことには、大きな意味がある。

この「しりとり」を、国語的な側面からみると、一つの単語の最後についている「音」の特定と理解の上に立って、自分の記憶の中の「特定の音のつく言葉」を想起しなくてはならない。さらに、その上で「音声化」されて発声される言葉が、答の言葉（単語）なのである。

「しりとり」遊びは、単語の中の「音」を区分することができないかぎり、自分で遊ぶことはできない。これと同じ系列に属する幼児の遊びの一つに、いわゆる「ジャンケン・ゲーム」がある。たがいにじゃんけんをして、たとえば、グーで勝つと、「グリコ（3音）」と言いながら3歩ほど進む。チョキで勝つと、「チョコレート」と言いながら5歩か、あるいは6歩ほど進むことになる。同じように、パーで勝つと、こんどは「パイナップル」と、これまた5歩か、6歩ほど進むことになる。この遊びが、S児に可能となるのは、まだ先のこととなる。というのは、ジャンケンの意味、勝ち負けの感覚が、まだ備わっていないからである。しかし、S児が「しりとり」を理解して、遊びとして成立しはじめたことは、大きな言葉上の進歩である。

さらに、S児の「しりとり」は、相手をする祖母を驚かせることにもなる。2007年11月9日、17時30分、S児と祖母は、風呂に入って「しりとり」遊びをするようになった。

祖母「しりとりしよう。つな。『な』のつくもの」。

S児「なすび」。

祖母「び、び、『び』のつくもの」とは言ったものの、祖母もなかなか思いつかない。『び』がつく言葉は、なんだろうと考えていると、S児が「ビニールぶくろ」と言った。結果的には、S児に先を越されてしまったのだという。

祖母「あっ、ビニールぶくろね。じゃ、ろのつくもの。ろ、ろ」、

S児「ろうそく」、祖母「あっ、ろうそく。く、く」、

S児「くじら」、祖母「らのつくもの」、

S児「らくだ」、祖母「だのつくもの」、

S児「だいこん」、祖母「だいこんでない、だのつくもの」、

S児「たいこ」、*「だ」と「た」が同じだと考えている。

祖母「だ。だのつくもの*。だんご。じゃ、ごのつくもの」、

*この場面でも、結果的には、S児一人が「しりとり」していることになる。さらに、子どもが、しばらく考えても考え付かないとき（「だ」のつく言葉）には、大人の側が、さっと答を言って次に進めるのも、スムーズに「しりとり」遊びを進めるためのアイデアの一つである。

S児「ごまい（5枚）」、

祖母「あっ、ごまい？ ごまいね、いのつくもの、いぬ。ぬのつくもの」、

S児「ぬりえ」、祖母「えのつくもの」、

S児「えんぴつ」

以上が、S児の「しりとり」の言葉である。幼稚園での最初の「しりとり」遊びからスタートして、家庭での意図的な取り組みの中でS児は短期間のうちに「しりとり」遊びに関しては、予想以上の学習成果を上げたようだ。

2. 「登場人物の名前」などに類する言葉

絵本や、いわゆる「お話」、物語などは、「虚構」の話であり、作り話である。その中に出てくる登場人物をめぐって、S児は、つぎのような言葉を使うことができ始めた。その最初の言葉となったのが、物語絵本『ごんぎつね』に出てきた主人公のキツネの名前の「ごんぎつね」であった。

つぎのような場面であった。

2007年11月10日午後、S児と山口市立図書館に行ったとき、祖母が物語絵本の『ごんぎつね』を借りてきた。さっそく自宅に帰ってから、1回だけ読むことにした。この話を読み聞かせているとき、S児は、ときどき他の本を見たりしていたが、祖母が意図的に声を大きくしたりすると、祖母の方を向いて『ごんぎつね』の話を聞くこともあった。

さらに、祖母はS児に向かって「ごんぎつねよ」といって、絵本の中の「ごんぎつね」の姿を指さして見せることもした。また、祖母は絵を指さして「この人が、兵十（ひょうじゅう）」などと呼びかけてもみた。こんな調子ではあったが、S児は、いちおう『ごんぎつね』の絵本の最後までを聞いていたのであった。

夕食後、母親が『ごんぎつね』の絵本を見ていたので、祖母がS児に向かって、「このキツネの名前は、なんというんだったかね」とたずねた。すると、S児は、小さな声ではあったが、「ごんぎつね」と答えたのであった。

祖母の「発問」に対するS児の「応答の言葉」の意味は大きい。祖母の発問は「このキツネの名前は、なんというんだったかね」であり、S児の応答の言葉が別の言葉であり、直前に聞いた「ごんぎつね」という虚構の物語の中の言葉であったからである。

この言葉の使い方は、12月に入って幼稚園で取り組まれることになる「生活発表会」での劇「ブレーメンの音楽隊」の言葉へと引き継がれることになる。

「ごんぎつね」から約1ヵ月後の12月9日、17時42分のことであった。家にいるとき、S児が「ワンワン」と言った。急に「ワンワン」という、日ごろ聞きなれていない言葉を使ったので、祖母は不思議に思い、「う？」という声とともに、首をかしげることによっ

て、たずねたのだという。

すると、S児から返ってきたのが「ワンワン、ブレイメンの音楽隊」という言葉であった。幼稚園では、生活発表会での劇の練習が盛んに行なわれている様子である。そこで、祖母は、つづけて「だれが出てくるの？」と、登場人物をたずねてみた。

S児から返ってきたのは、何と「ロバと、イヌと、ネコと、ニワトリ！」という、4つの動物の名前が連なった言葉であった。これが、幼稚園で劇という表現活動にとりくむ「教育的意義」なのである。毎日、劇の練習が繰り返される環境の中において、S児は、同じ仲間の子どもたちが「ロバやイヌやネコやニワトリ」になって活動をしているのを見ているのである。だからこそ、家で急に祖母から「だれが出てくるの？」と問いかけても、即座に「ロバと、イヌと、ネコと、ニワトリ」と応答ができるのである。それほどに、目の前で繰り返されている劇の練習場面から、たくさんのことを学びとっているということである。

すでに我が子の「配役」は知っているのだが、母親は「Sは、なにをする？」と問うことにした。S児は、即座に「どろぼう」と、劇で登場することになる自分の役の名前を答えることができたのである。

この母親の「Sは、なにをする？」という問いも、生きている。子どもたちへ向かっては、すでに分かりきっているであろうと予想される事柄も、問いとして投げかけられることにより、子どもは生き生きと応答することができるのである。発問や問いかけは、子どもの新たな活動を呼びおこし、誘いだし、促進する役割を果たす。

この「ロバと、イヌと、ネコと、ニワトリ」という言葉表現は、12月14日の生活発表会の場で見ることになるS児にとっても、大いに楽しめる言葉である。発表会のあと、今度は家庭において、「劇の言葉」は何度も、動きとともに再現された。S児にとっては、それ以上に、10日後のクリスマスになって、ふたたび生かされることになるのである。

次のような場面である。

生活発表会と重なるようにして、幼稚園ではクリスマスやサンタクロースやプレゼントが話題になったらしい。2007年12月11日18時41分、筆者は、クリスマスが話題になったS児との会話のついでに、「サンタさんが、来るかなあ？」と、まずはS児がクリスマスやサンタクロースやプレゼントのことを知っているかどうかを知るための、大らかな質問を投げかけてみた。祖母も、S児に対して「サンタさんに、なにを、お願いするんかね」と問いかけてくれた。

ところが、S児の口から発せられたのは、何と「マリンライナーと、SLと、きかんしゃトーマス」というリアルな答であった。「ブレイメンの音楽隊」の4人の登場人物を答えたときと同じように、「と」をつかって、3つのものを並べ立てたのであった。

私たち、S児の近くに生活する大人3人（母親、祖父母の3人）は、顔を見合わせて驚くことになった。というのは、前日までは、クリスマスのプレゼントといえば、まちががなく「マリンライナー」一つだけであった。ところが、並列の（並べ立ての）「と」が上手に使いはじめたことから、とうとう「1つのプレゼント」から「3つのプレゼント」へと進化したことになる。プレゼントという「もの」の増大に限ったことではない。その進化は、つぎのような場面での、「ことば」の使い方にも及んでいたのであった。

12月13日、19時ごろ、S児が寝ようとする布団の中での出来事である。つぎのような

会話が交わされたという。

祖母に対して、S児が「サンタさん、くる？」と、真剣にたずねたという。それに対して、祖母は「うん、くるよ」と答えて、さらに「サンタさんに、なに、おねがいするの？」と、すでに知っていることなのだが、たずねてみたという。

すると、S児から返ってきた言葉は、「マリンライナーと、エスエルやまぐちと、きかんしゃトーマス」なのであった。最初のプレゼントの言葉と比べてみよう。最初の言葉は「マリンライナーと、SLと、きかんしゃトーマス」であった。じつは、眠るときの言葉には、元の「SL」という言葉の後ろに、「やまぐち」が付け加えられているのであった。

さらに、のちになると、この「やまぐち」の後ろに、さらに2文字が付け加えられて、最終的には「SLやまぐちごう」になっていく。

その夜、S児が寝たあとの夜遅くのことである。祖母、母親、筆者の、大人3人の話は、次のようになった。プレゼントの数を3つにするか、それとも1つにするか、である。

母親「3つ、いるんかねえ」

祖母「あれだけ、はっきりというんだから」

筆者「なに、買ってやればいいではないか。いくらだ」

祖母「お父さんに、買ってもらえばいい・・・」

結局のところは、サンタクロスに、たいへんな労力をかけることになった。クリスマス夜の翌朝、S児は、「マリンライナーと、SLやまぐちごうと、きかんしゃトーマス」の3つのプレゼントを受け取ることになった。

その時期（12月13日）の祖母の述懐である。

11月末ごろまでには、まだ、ときに頭を壁にぶつけたり、寝っころがって両足のかかとを床に打ちつけたり、自分の手をたたいたりする、いわゆる「自傷行為」があった。

しかし、いまは、もう見られないことに気がついた。いつも、身近にS児のそばにいて、丁寧な世話をしてきた祖母が、そう言ったのであった。その時期は、言葉が豊かになった時期と符合するというのである。

言葉の意味がわかり、指示の聞けるようになったS児の、ほかの場面での事例がある。

2007年12月9日（日曜）早朝、筆者が早朝05時20分に起床して、階下へ降りた。S児は、土・日にやってきた父親と階下の居間に寝ている。筆者は着替えをするために、S児と父親の寝ている部屋の押入れから衣類を出さなくてはならない。そうっと音をたてないように戸を開けたものの、予想通り、S児が目目を覚ましていて、布団の中に入ったまま、手には遊び道具のカードを持って、こちらを見ている。

筆者「おじいちゃんは、いまから、お風呂に入るから、史龍君は、お父さんと寝ていてね。寒いから、コンコンになる（風邪をひく）からね」と伝える。S児は、そのまま、布団の中に入っている。筆者は、風呂から出たあと、外出の準備をする。

出るとき、S児が物音を聞きつけて、これまた、予想通り、布団から出て、こちらへ来ようとするときに、ちょうどこちらが戸を開けることになった。

筆者「あねの、おじいちゃんは、仕事へいくからね、S君は、おねんねしててね」、そして、父親に「S君が、外へ出たらいけないので、見とってね」と頼む。さらに、S児

に対しては「お父さんを、布団の中で抱っこしてあげてね。おじいちゃんは、行くからね。S君は、まだおやすみよ。はい、おやすみ」と声をかけると、S児は、小さな声であったが、こちらを見ながら「おやすみ」と言ったのであった。

それまでのS児であれば、玄関までついてきたり、外に出たりする可能性もあったのだが、この時期から、言葉だけの指示で、周囲の大人の言うことが聞けるようになった。

時刻は、5時45分のことであった。

この時期、S児たちと一緒に「お寿司のレストラン」へ行くことになった。S児も、うれいらしく、ニコニコとした表情である。筆者は、S児に「レストランに行く人？」と質問してみた。S児は、即座に「はい」と声に出すと同時に、右の手を挙げた。帰りには、「こんどまた、レストランに行く人？」とたずねてみた。S児は、この質問に対しても、はっきりとした口調で「はい」と答えて、挙手した。この「はい」という言葉と挙手の組み合わせは、幼児たちの大好きな表現方法であり、表現活動である。

3. 「図鑑」の言葉

12月9日から、偶然のようにではあったが、S児と筆者（祖父）とは、『魚図鑑』をいっしょに読むことになった。それは、1ヵ月後の、今も続いている。

きっかけは、つぎのようなことであった。

2007年12月9日（日曜）16時ごろ、筆者は休憩するつもりで、自宅へ帰ってきた。2階自室の布団の中に入って新聞を読んでいると、S児が部屋に入ってきて、布団の中にも入ってくる。とうとう、いっしょに寝ることになった。

ところが、何もしないで、ただいっしょに寝るといふことには、すぐに飽きてしまうようで、数分もたたないうちに1階に下りていった。

それまでも、S児は「おじいちゃんと、いっしょに寝る」といって、布団の中に入ってきて、数分もしないうちに「下へいく」などと言っては出て行って、ずっと一緒にいるという機会は、まったくなかったのであった。

しかし、このときは違った。今度は、1階の本箱に置いてある『魚図鑑』（旺文社学習図鑑1976）を、小脇にかかえて帰ってきたのであった。

とうとう、筆者の左腕の上にS児の頭を乗せて、さらにその左手と右手で重い『魚図鑑』を広げて、両手の指先でページを開いていくことになったのであった。こうして、二人で布団に入って、並んで『魚図鑑』を見ることになったのである。

最初のうち、筆者は図鑑の中の1匹の魚を指さして、「お口は、どれ？」「お目めは？」「しっぽは？」という3つの簡単な質問をして、S児が、言葉で答える代わりに指さす形を繰り返していた。

さらに、「お腹はどれ？」が加わって、「背中は？」も、付け加えることになった。これを、数十回、繰り返したであろうか。

次に、『魚図鑑』の本来の役割である「魚の分類（仲間）」の文字の「カタカナ」表記の部分だけを声に出して読み始めた。

S児に「タイ」「キス」「マンボウ」などのカタカナ表記を読ませたあと、かならず筆

者が、大きな声で、はっきりと発音して、それを2度ほど繰り返させた。そのあと、もう一度、カタカナを読ませると、最初よりは、かならずスムーズに、しかもはっきりと、大きな声で発音することができた。上手に発音できたときには、「上手だね」とか「えらいね」などと評価することを忘れなかった。

タイ、キス、ハゼ、マンボウ、サンマ、サメ、イワシなどの、簡単なことから始めて、40分のちには、スズメダイ、チョウチョウウオ、モンガラカワハギ、タツノオトシゴ、・ ・ ・などの難しい読みと発音のカタカナも読むことが出来はじめた。

たどり読みの音読をしたあと、筆者がスムーズな読みを聞かせると、かならずS児の読み方は上達しているのであった。(2007年12月9日)

翌日の12月10日(月曜)。風邪気味の筆者は、17時過ぎに帰宅すると、S児も居間で寝ているところであった。S児も幼稚園で吐いたとのことで、14時ころから寝ているとのことである。筆者は、食後、すぐに2階の自室に上がって、横になっていた。

S児が目を覚まして起きたのは知っているのだが、風邪をうつしてはどの心配から、すぐに2階へ上がったのであった。このときの祖母のメモによれば、「S君、魚の図鑑を持って、祖父のところへ行くが、すぐ降りてくる」とある。じつは、筆者(祖父)が「おじいちゃん、コンコンだからね。きょうは、(お魚図鑑は)おやすみよ」といって、明かりもつけないままで、伝えたのであった。S児は、すぐに聞き分けて、階段を降りていく。

降りる途中、大きな物音。手に持っていた『魚図鑑』を落とすように見える。祖母のメモによれば「階段を降りる途中、S、図鑑を落とす。表紙の背中のところ、少し破れた」とある。祖母が、居間に行くと、S児「なおして」という。すこし機嫌がよくない感じ。祖母、背表紙に糊とビニールテープを貼ってというので、補修した。S児、納得する。図鑑を補修する直前、S児が吐いてしまった。体調がよくないのだが、言葉が通じている。

『魚図鑑』をめぐる言葉は、新年を迎えても続いた。

1月5日は、S児と母親の二人は、下関市の水族館へ出かけた。そこで、出かける前の支度をしながら、『魚図鑑』に載っていた魚が、水族館にいたことが話題になる。

S児「マンボウとモンガラカワハギ、おった」

S児「モンガラカワハギとマンボウとフグ、おった」といって、『魚図鑑』をさがす。

また、1月6日に、急に4人で出かけることになったSLを見に行く旅行には、『魚図鑑』を持参することになった。S児が持っていくというので、筆者のバッグの中に入れることになった。宿舎に到着すると、すぐにとりだしたのはS児であった。

そして、いつものように、『魚図鑑』の中の、つぎのような言葉が、S児の口によって音読されるのであった。

- 表紙の絵の中の、マンボウ、キンギョ、サメ、トビウオ。
- 目次の2枚目の絵、タツノオトシゴの数を数える。1～8まで。
- 「さくいん」の下の絵。トビウオの数を数える。1～8まで。
- サケが、川の流れの中を登る絵。アトランダムの数えづらい絵。

1～16匹まで。筆者が指で押さえる。

○「この図鑑のつかいかた・しらべかた、海の魚」の中の絵。

筆者がゆびさして、S児が、その名前を言う。

タツノオトシゴ、トビウオ、マンボウ。分かりやすいものだけ。

○「魚のからだのつくり」の絵の中の、骨、目、口、しっぽ、せびれ。

○本文の題名「トビウオ型のなかま」の場合は、魚の名前の「トビウオ」だけを読んでいく。

ページをめくっては、題名の中の魚の名前だけを読み進めていく。

つぎのような順序である。

トビウオ、サンマ、ボラ、マグロ、サメ、イワシ、サケ・マス、アジ。

途中、見開き全部を使つての「イワシの大群」のカラー写真のところでは、S児と筆者の二人で「わああっ」と大きな声を出して、驚くことになっている。もう2箇所、驚く場面がある。それが、「ごんずいの幼魚の大群」のカラー写真と、「さんご礁の中のリュウキュウハナダイの群れ」のカラー写真の見開きである。

つぎのような順番で、カタカナの魚の名前の部分だけを音読していく。

マナガツオ、タイ、スズメダイ、チョウチョウウオ、モンガラカワハギ、ハタ、ベラ、キス、ドチザメ、タラ、ハゼ、カレイ、エイ、ウナギ、タチウオ、タツノオトシゴ、フグ、マンボウ、サギフエ。

さらに、1月6・7日の時点では、次のページに進んで、振り仮名のつけてある「深海にすむ魚」「上流にすむ魚」「中流にすむ魚」（以下略）などの難しい言葉も読んで、はっきりと声を出すことができるようになっていた。

1月8日、14時05分、休憩のために帰宅した祖父（筆者）が、S児に魚図鑑を見せて、「これ、なに？」とたずねると、S児は「マンボウ」と答えた。さらにS児は「すいぞくかんで、見たねえ」と付け加えた。

1月10日、朝8時05分、幼稚園に行く支度をしたあと、居間の床の上で魚図鑑を広げて、じっと見ている。そして、S児は、独りごとのように、「○○って書いてある」と言っている。

マンボウのページをめくって、S児は「マンボウって、書いてある。すいぞくかんにおったね」と、近くにいた母親に向かって言う。

8時21分になっても、まだ図鑑を見ている。

さらに、「タチウオって書いてある。タツノオトシゴ・・・」と続ける。

*図鑑は絵と文字で成り立っている。幼児には親しみやすい物環境の一つである。『魚図鑑』から出発したが、いまでは動物図鑑、鳥図鑑へと広がりを見せはじめている。子どもたちは、大人とちがって、繰り返しの行動に飽きることはない。この事実を忘れて、周囲の大人や教師自身が、ドリルやドリル的活動を子どもたちが苦痛と感じているなどと考へてはならない。

1月10日、夕方、ババ抜きゲームのあと、S児は入浴する。その間に、祖父は2階で

布団の中に入る。風呂から上がってきたS児が『魚図鑑』を抱えて、布団の中に入ってくる。このときも、表紙から、いつもの「上流・中流にすむ魚」あたりまで、声に出して、読み終える。読み終えると、『魚図鑑』とマリンライナーを抱えて、階下に降りていく。

18時55分、階下へ降りていった祖父に、S児が「魚図鑑を読んだねえ」と言った。このときの言葉の中に、助詞の「を」が付いていた。これまでに、あまりなかったことである。

1月11日、S児、体調を崩して幼稚園を欠席する。

その夜も、ババ抜きをすることになる(3日目)。ババ抜きのあと、祖父は夕食をとる。S児も、いっしょにパンを食べる。

食事が終わると、S児は「ほいじゃ、魚図鑑」といって、本箱から『魚図鑑』を持ち出して、祖父のところに持ってくる。すぐに、コタツに入った祖父のひざ上の上ののって、いつものように表紙から終わりまで読むことになった。

19時50分から56分までの6分程度であった。目次の下の魚の数を数える。フグ、5匹。ジンベイザメ。サケの川のぼり、16匹などである。

1月11日8時20分、『鳥図鑑』を出して、コタツに入って横になりながら、10分間くらい、ページをめくっていたが、S児は祖母に向かって「おばあちゃん、おさめて」という。祖母は『鳥図鑑』を本のケースに入れて、本箱の中のいつもの場所に納める。そのあと、つぎのような会話が交わされた。

S児「おばあちゃん、はんたい」という。

祖母「えっ？」

S児「おばあちゃん、はんたい」

祖母「あっ、これ？」

祖母が納めた『鳥図鑑』の背表紙の出し方がちがうのかと思って、『鳥図鑑』の背表紙の出し方(向き)を変える。

S児「はんたい。はんたい」

祖母、納めた位置(順序)を変える。

S児「はんたい」

祖母、『鳥図鑑』の位置を、また変える。

S児、起きてきて、図鑑を入れ替える。納得して、また寝る。よく見ると、魚図鑑、水生昆虫、鳥図鑑の順になっている。

図鑑が、S児の「身近な物」になってきている。

4. 「SL」の言葉

2008年1月6・7日、SLが野外に展示してある笠戸島へ、一泊二日の旅行をすることになった。行くとき、途中で下松駅東側の踏み切りを通ることになった。ちょうど、そのとき、踏み切りの赤いランプが光り、警報音が響いてきた。しばらくして、目の前を普通列車が通過した。列車が通り過ぎた直後、S児が「わあ、よんりょう(4両)だね」と声を上げた。

偶然なのだが、帰りにも同じ踏み切りで、列車通過の警報がなっている。同じように普通列車が通過した。S児は「よんりょう（4両）」という。かなりのスピードで目の前を通過する列車の車両数を数えていたのである。

*サンタクロースからのクリスマスのプレゼントは、マリンライナー、SL山口号、機関車トーマスという3種類の列車模型であった。S児は、毎日、飽かずに列車の模型で遊んでいる。そのこともあって、SLの実物の野外展示を見に行くことにしたのであった。

SLの屋外展示場に到着して、車をSLの目の前につける。すると、S児が「つきました」という。以下の会話がつづく。

祖父「Sくん、これ、なに？」

S児「えす、える」

祖父「およろうかね、おばあちゃん」

S児は「ほじゃ、行ってみようか。入ってみようか、上がろうか」などといって、階段をのぼって、蒸気機関車の運転室に入る。運転席に座ったS児は、大きな声で「さあ、しゅっぱつ、しんこう」という。SLの運転手になりきった言葉である。

*サンタクロースの持ってきた3種類の列車模型にも、実物のSLにも興味を抱きつけてきたS児ではあるが、次の「ババ抜き」は、「SLの言葉」を凌駕することになった。

5. 「ババぬき」の言葉

2008年1月8日（火曜）、3学期が始まり、S児も登園した。この日、S児の年中組では、トランプをつかった「ババぬき」を楽しんだという。しかし、S児には、ババぬきの意味が分かっていないので、参加しようとしなかったということである。

あとで担任の先生とS児が、二人きりで「ババぬき」をしたのであるが、やはり、この遊びの意味が分からない。そこで、担任の先生からは「数字には興味があるようだ。* 同じカードを3枚出すのはだめよと教えた」などの伝言があったという。このような経過もあって、家でも「ババぬき」ゲームをしようとするようになった。

*S児は、『魚図鑑』の中の、フグの絵の数が5匹であること、川を遡上するサケの数が16匹であること、さらに目の前の踏み切りを通過する普通列車が4両であることなど、数に関心を持ち、具体的な場面で数えることができるようになってきている。

第1日目

1月9日（水曜）17時35分、帰宅した筆者は祖母より、幼稚園の始業式の日「S児のババぬき」遊びの様子を聞き及び、この日から家でも取り組み始めることになった。

夕食のあと（18時ごろ）、すぐに「ババぬき」遊びをすることになる。S児と祖母が一緒の組になり、母親と祖父がメンバーとして入り、3チームでゲームをすることになった。

S児は、配られたカードを祖母に持ってもらって、カードの中から「同じ数のカード」2枚を見つけることは、出来はじめる。

また、ババ（ジョーカー）のカードが祖父に来たときに、祖父の「うわあ」という驚きの声、「ああ」という悲しむ表情などを目の当たりに見ることになり、徐々に「ババ」のカードが自分のところに来ると「困る」という考え方を獲得することができたようだ。S

児は、ババのカードを見ると、「うわあ」と声を上げて喜ぶ。

しかし、最後にババが残ると「負け」になり、早く手持ちのカードがなくなると「勝ち」になるということは理解されていない。カードを取り始めるときの順番を決めるための「ジャンケン」についても、その意味は理解されていない。ジャンケンそのものが、まだ理解されていない。

初めて「ババぬき」ゲームに取り組んだ日、3回ほどゲームをすることになる。もっぱらの関心事は、ババの移動である。

第2日目

1月10日（木曜）の夕方、家庭での第2回目の「ババ抜き」ゲームをすることになる。メンバーは、昨日と同じ、母親・S児・祖父母の4人である。17時20分、S児と祖父だけの「二人のババ抜き」も試みる。これは、同じ数字のカードを見つけたり、取り出したりすることに慣れるためである。ババを確認して、これが来たら困るという意味を再確認することにもなった。ババのカード（ジョーカー）の行き来には、興味があって、1回目の「二人きりでのババ抜き」でババ・カードに対する祖父の驚きや困ったという表情がおもしろらしく、1回目のゲームのあとの夕食をとりながらも、思い出し笑いをするのであった。

17時30分、4人で夕食。夕食が終わると、すぐに「ババ抜き」をすることになった。S児には祖母がついて、母親、祖父との3チームに分かれて、ゲームをすることになる。祖母は、配られたカードを集めたり、見比べやすいように、手の中で扇状に広げたり、S児の気付かない同じカードを示したり、数字を言ったりなどの、援助を行なった。

S児には、ババのカードの存在と行き来がおもしろいらしい。夕食後の6時過ぎには、3回ほどゲームをすることになる。3回目が終わったとき、「これで終わりよ」と言い聞かせた。そのとき、S児は「終わらない」とは言っていたが、どうにか大騒ぎはしないで、「ババぬき」ゲームを終えることができた。

この日、3回の「ババぬき」ゲームを終えたあと、S児と祖母が風呂に入った。風呂の中でS児は「ババ抜き、おもしろかったねえ」といった。

第3日目

1月11日、朝6時20分ごろ、布団の中で。

この日の朝、S児は、6時ごろ目を覚ましていた。急に、布団の中で「キャア、キャア」と笑い出す。どうやら、思い出し笑いの様子であった。S児が「ババがきて、いけんねえ」と言ったあと、また笑った。前日夕方にも、4人でした「ババ抜き」ゲームでの「ババ」のことを思い出した様子である。

さらに、S児は「ババ、こわい。ババ、こわい」と言ったあとも、「キャア、キャア」と笑いつづける。となりに寝ている母親にも、「ババ、こわい。ババ、こわい」と話しかける。最後に、祖母に「ババ、こわいねえ」といって、声をあげて笑った。

その直後、S児は祖母に「もう、おきよう」という。起き上がったあと、S児は「朝のごあいさつ」と祖母に呼びかける。そのあとは、いつものように、S児と祖母とが向かい合って座り（正座して）、二人で「おはようございます」と言って、両手を前について、お辞儀をする。

1階に下りると、一人でトイレに行く。そのあとは、さっそく動物図鑑をコタツの上に広げている。イヌのページを見ている。しかし、コタツに入っている様子には、いつもの元気がない。食欲も起きないようす。やっと起きてきて、チーズ1個を、ようやく食べ終える。いつもの食欲ではない。テーブルの上に、頭を乗せている。

祖母、コタツの中に入って横になっているS児に「幼稚園に行く？ いかない？」とたずねると、S児は「行く」とは答えるものの、体を横にしたがる。一度は起きかけたが、ふたたび横になってしまう。

このような状態がつづくので、8時07分に、今日は幼稚園を「お休みする」ことになった。

10時50分、S児、横になって、魚図鑑を見ている。

S児が、急に「ハハハ」と、笑い出す。

S児「おかしいね、ババがきて」

S児「ババがきて、こまるねえ」

S児「おかあさん」と言いながら立ち上がって、台所にいる母親を見る。

S児「ババが、おかしいね」と話しかける。

S児「アッハッハ、アア、ハハハ、フフン」と声をあげて、笑っている。

S児「魚図鑑」を本箱に納めながら、「ババが、おかしいねえ。いけんねえ」という。

10時55分。

S児「おかしい。トランプ、トランプ」と、祖母にトランプを出してくれるように言う。

祖母「まだまだ」

S児「じゃあねえ、おかあさん、いい？」

S児「(トランプは)どこにある？ どこにある？」

祖母に、S児「どこにあるの？ トランプ」

S児「ババがきて、こまっちゃったねえ」

10時58分

S児が祖母に向かって「トランプ。トランプ」と言ってくる。ババ抜きをしたらしい。

S児「トランプ、やる。おかあさんもやっていい？」

祖母「お母さんは、いま、お仕事」。昼食のための料理をしているので、「お仕事」と伝える。

S児「じゃあね、ババにしようか。ババ抜きしようか。する？ する？ ババ抜きする？」

母親「おじいちゃんとしてしょ」

S児「おじいちゃんとする。おじいちゃん帰ってくる」

S児「トランプ、どこにある？ ある。ある。(腕をのばして指さしている)。ここにある、ここにある」。

そういつて、祖母を、トランプの置いてある方向に連れて行こうとする。

祖母「おばあちゃん、(いま)本を読んでいるからね。おじいちゃんが帰ってきたら、しようね」

S児「おじいちゃん、帰ってくる。おじいちゃん、帰ってくる」
そのあと、少しおとなしくなって、横になっている。11時10分。
横になったまま、S児「フフフ」と笑って、「ババがこわいねえ」という。
11時25分、いつの間にか、寝ている。

18時、祖父が外から家に電話して、今から家に向かうことを伝える。

18時17分、S児、このごろよく見ている「こまねこ」のビデオを見ていたが、急に、
S児「おじいちゃん、帰ってくる。ババ抜きに帰ってくる」と言い始める

18時22分、祖父、帰宅する。横になっていたS児が、祖父の帰ってきた物音に気付いて、すぐに起き上がり「おじいちゃん、おじいちゃん」と呼ぶ。

S児「あのね、ババ抜きにする。トランプ」

祖父「いま、しようか」

S児「トランプする。トランプしようかな」

祖父「じゃあ、テレビ、消して」

S児、すぐにテレビを消す。

祖父「そうね、ババ抜きにする」

S児「ワッハッハ」と大笑いをする。元気な声になる。

18時25分～40分まで、2回ほどババ抜きをする。

まだ、ババが、だれのところへ行くかだけが、主要な関心事で、勝ち負け、勝ち順などのおもしろさは、分かっていない様子。

第4日目

1月12日（土曜）11時10分、筆者（祖父）が外出から、いったん帰宅する。S児、祖父に向かって「トランプする。ババ抜きにする」という。

祖父「また、帰ってきてからね。夕方やろうね」

さらに、台所にいた祖父に対して、S児「トランプ、する」という。

S児、食器棚の上の方を指さして「ある。ある。どこにあるの?」という。

S児「トランプする。ババ抜きにする。おじいちゃんといっしょにやる」

祖父「Sくん、行ってくるよ」

S児「おじいちゃん、鍵、しめる」

S児、すこし涙声になって「こんど、おじいちゃんと、こんばんも、おじいちゃんといっしょにトランプ、する」

S児「トランプ、どこにあるの? ないねえ」

午後、おやつを食べたあとで。

S児、トランプを探し出して、手に持っている。

祖母と母親に対して、何度も「トランプしよう」とせがむが、トランプは祖父がいるときにするという決まりにしたいとの思いから、次のように言った。祖母「おじいちゃんが、帰ってきてからしようね」と。

この言葉を繰り返すことになる。さらに、S児が「トランプを持っていい?」と、何度もたずねるので、「いいよ」とこたえる。

S児は、トランプのケースの中から、カードを取り出しては、またケースの中に入れようとするが、入らない。そこで、S児は祖母に「入れて」と頼んでくる。祖母「少しずつ入れてごらん」と教える。S児は、1枚ずつ入れている。最後には、祖母が入れることになる。この動作を、何回か繰り返すことになる。

18時15分、祖父が帰宅する。S児は喜んで、すぐにババ抜きをすることになる。3回ほどする。18時35分まで、約20分間であった。3回目を終わっても、納得したのか、またしようとは言わなかった。歯磨きをし終わると、自分でパジャマを着替えた。*

*動物園や水族館に行くなどの好きな外出をするとき、S児は進んで着替えたり、持ち物の準備をしたりなどができる。S児にとって現在の「ババ抜き」は、動物園や水族館へ行くことに匹敵するような、楽しい遊びになっているようだ。

S児の場合、ババ抜きゲームに取り組むことで、次のような力が育ってきたように思う。以下は、1月12日、4日目の時点での考察である。

- 「トランプ、やる」「ババ抜きにする」「おじいちゃんと、する」など、ババ抜きをするための、あるいは、みんなをババ抜きに誘うための独自の言葉が使われるようになった。
- カードが配り終わるまで、触らないで、ときには「手はおひざ」に置いて、待つことができるようになった。「カードに触ってはいけない」と注意するよりも、「手はおひざね」のように典型的な行動を示すほうが、子どもにとっては動きやすいということも、分かってきた。
- トランプカードの同じ数のカードを見つけることができ、2枚をセットにして、取り出し、みんなの前に置く。
- ジャンケンで、取る順番を決めるときに、ジャンケンの手を出す。
S児は、いちおうグー、チョキなどを出して、ジャンケンをするが、まだ、ジャンケンで決める意味が分かっていない。
- 母親がトランプを切って、順番に配っていく。そのときに、ただ「待つ」のではなくて、待つ間の活動として「ホッ」とか、「1, 2, 3」などの声を出すという行動化も試みた。ときに、自分から言い出すこともあった。
- ババのカードの意味が分かっていて、とりわけババのカードをめぐるおもしろがったり、喜んだりする言葉を発することが多い。当初より、祖父が、ババが来ると驚いたり、悲しんだりする動作や表情をしてきた。
- 次の段階は、残った持ちカードの数、早くカードがなくなったほうがよい、などに着目させるとよいか。

第5日目

1月13日(日曜)夕方、18時30分より45分まで、父親も加わって、4チームになって「ババ抜き」を行なう。S児は、祖父の帰りを、ずっと待ち続けていたということである。

この日の「ババ抜き」では、左右の手を使って2枚のカードを選び出す速さに、スピードが加わった。また、待つ間の姿勢や、「手はおひざ」なども、きちんとできた。

ゲームは3回で終わった。S児は「4回目」とは言ったが、「どうしてもやりたい」と駄々をこねたり、不機嫌になったりすることはなかった。このババ抜きゲームに参加するこ

とで、感情を抑制する力も伸びてきたように思える。18時30分から45分までの約15分間。S児の顔に笑顔が絶えない。S児は、すぐに入浴の支度をはじめ。いつもよりスピーディーな行動である。

おわりに

S児の言葉は、同年齢の他の子どもと比較すると、まだまだ遅れていることは否めない。しかしながら、この2年ちかくの幼稚園と家庭の教育の中で、目を見張るほどの進展を見せてくれたことも事実なのである。本論では、限定された場面でのS児の言葉を中心に、その様子を詳しく記録することから出発してみた。しかし、当初目ざした教育方法レベルの考察は十分ではなかった。他日を期したい。

小さな子どもと日常生活を共にしてみても分かったことがある。それは、印象的で、繰り返かえしても飽きないような体験の中でこそ、言葉は生まれ、ほとぼしり出て、使われるということである。

教育の名において試験（チェック）をしては障害の程度を確定する仕事ではなくて、教育の名において、子どもの障害の現状を一步でも治癒と改善の方向へと向かわせる仕事こそ、われわれ教師の仕事でなくてはならない。本論の準備と執筆の過程において、考えさせられたことである。

もう一つは、荒れて騒がしい学級や崩壊学級を自主的な授業参加のできる学級へと変える仕事も、また、遅れがち子どもや障害によって進度の遅れる子どもに対して学習による伸びを実感させる仕事も、教育方法においては通低している、ということである。